

冒頭あいさつ（松本美奈）

今、学校現場では「個別最適の学び」が進められています。子ども一人ひとりを理解するために、データの利活用が欠かせないと言われ、さまざまな場面でAIが導入されています。その結果、子どものデータが流出したり、知らないうちに企業の商品開発に使われたりする問題も起きています。

私たちはAIを道具として扱い、よりよい教育の実現を叶えてくれるはず、と楽観しがちです。これに対し、歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリ氏は「AIは道具ではなく、自ら学習し判断する“非生物の行為主体”だ」と指摘しました。AIは、私たちの理解を遥かに超えるスピードで発達し続け、いまや銀行の融資や軍事判断まで行っています。私たちはこのまま子どものデータをAIに委ねていいのでしょうか。子どもはそれを望んでいるのでしょうか。そもそも、子どものデータは誰のものなのでしょうか。

皆さんと一緒に掘り下げていきます。

子どものプライバシー権

堀口悟郎（岡山大学）

1 プライバシー権

プライバシー権とは、自分の情報を他人に勝手に収集・利用・公開されない権利です。日本では憲法13条がその根拠とされ、自己情報コントロール権という考え方が広まりました。現代では「保管・利用」段階での侵害が重要な問題となっており、AIによるプロファイリングがその典型例です。情報社会が進む中で、プライバシー権は単なる私生活秘匿にとどまらず、情報の使われ方全体を問う権利として再定義されています。

2 子どもの権利

子どもは理解力や判断力が未成熟であるため、自律だけでなく「保護」も重視されます。自己決定を支援する保護や、子どもの意見を聴く関係者の役割が重要です。教育現場では、プロファイリングによる「決めつけ」が個人像を歪め、子どもの成長機会を奪う危険があります。こうした点からも、子どもの権利には特別な保護が求められます。

3 EUのGDPR

現代のプライバシー問題の核心は、AIによる「プロファイリング」にあります。プロファイリングとは、個人のさまざまなデータをもとに、嗜好、健康状態、経済状況などを自動的に推測することを指します。たとえば、子どもの授業中の視線や表情、反応速度をAIが解析し、集中度や感情などを推測する実証実験が進められています。プロファイリングの結果は、真実に合致している場合もあれば合致していない場合もありますが、いずれにせよ重大な結果を招きます。というのも、真実に合致している場合には、センシティブな情報を取得されることになりますし、真実に合致していない場合には、誤った個人像に基づいた取扱いを受けることになるのです。

EUのGDPRは、子どもの個人データに対して特別な保護を与えており、特にプロファイリングについては厳格な規制を定めています。また、EUのAI規制法は、教育機関において個人の感情を

推測するAIの使用について、「許容し得ないリスク」を抱えていることを理由に、禁止しています。こうした法的規制が、安心して個人データを利活用できる基盤となっています。

4 日本の個人情報保護法

日本の個人情報保護法は、かつて憲法との接続が意図的に避けられ、憲法上のプライバシー権とは切り離された法律であるかのように運用されてきました。GDPRが成立し、EUから「充分性認定」を得る必要が生じたことを契機として、日本の個人情報保護法もGDPRと同じく「プライバシー権の具体化法」と位置付けられるようになりましたが、なおもプライバシー権との関係は曖昧なままです。目的規定にプライバシー権は明記されていませんし、同意の定義や要件も明記されておらず、プロファイリングに関する直接的な規律も存在しなければ、子どもへの特別な保護規定も設けられていません。このため、教育現場における子どもの個人情報に対する保護は十分でなく、ただ形式的に本人や保護者から同意を取得しておく、という程度にとどまっているのが現状です。

AI法案の審議も進められていますが、EUのような厳格な規制とは異なり、企業への義務や罰則は設けられていません。教育現場での感情解析AIの導入も進行しており、規制が追いつかないまま実証事業が行われています。文部科学省のガイドラインなどが補完的役割を果たしてはいるものの、法的拘束力には限界があります。

アクセルしかない車は危なすぎて誰も乗らないように、プライバシー保護が十分に施されていないデータ利活用は社会に広まらないでしょう。教育データ利活用を推進するためにも、ブレーキ、シートベルト、エアバッグのようなプライバシー保護の「安全装置」が不可欠です。特に、プロファイリング規制と子どもへの特別な保護を明確に制度化することが、教育データ利活用の信頼性を高める道筋であると考えます。

AI時代 子どもは先生に何を求めているか

AIによるデータ収集、管理で、教育をどうしたいのか。私たち大人が考えていく際に、忘れてならないのは、学校の主人公、子どもたちの意思です。子どもたちは学校に、先生に何を求めているのでしょうか。杉並区立天沼小学校6年生に「学校のどんな仕事をAIに任せたいか」を二軸で聞きました。「AIに任せたいか」「10年以内に実現すると思うか」——この二軸です（図参照）。

結論から申し上げますと、大人の考えとは距離がありました。

掃除や集金といった作業は、AIで十分。ルンバがあるじゃないか。文科省はじめ大人が「教師の仕事」と考えている「授業準備」も、ネットで簡単に資料探しはできると見えています。

ところが、「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要がない」とされる「休み時間の対応」は「AIにはできない」、支援が必要な子への対応も「先生にしてほしい」とはっきり答えます。なぜか。AIには感情がないから、自分の気持ちをわかってくれない、子どもたちはそう感じているのです。

授業も同じです。算数のドリルならAIでいい。でも、国語や道徳のように「自分とは違う考え方に気づく」授業は、AIではできない。雑談の中で先生がふと語る失敗談や本音——そんな「人間らしさ」が子どもたちにとっては大切な学びの瞬間なのです。

特に女子は、AIに対して警戒心を前面に出し、人間の先生への期待を強く語っていました。
「AIは経験に基づく話ができない」「雑談がない授業はつまらない」。テストの採点一つとっても、AIは型にはまった答えしか認めてくれないけれど、先生なら「面白い答え」にも目を留めてくれると信じています。

子どもたちは、AIを便利な道具として認めながらも、「人と人とのつながり」を大切にしています。AI時代だからこそ、「話しかけてくれる」「寄り添ってくれる」「一緒に悩んでくれる」——そういう先生を求めているのです。

AIができることと、AIにはできないこと。子どもたちは冷静に見極めています。そのうえで「やっぱり先生がいい」という気持ちを伝えてくれました。

薩摩博之氏コメント

AIには感情がないから、自分の気持ちをわかってもらうのは難しい。子どもたちは素直にそう話していました。アンケート結果を見ても、やはり掃除や集金、授業準備といった“作業”はAIでいい。でも、休み時間や給食、部活動といった「人との関わり」はAIにはできないという声が多く、私たち大人が思っている以上に、その感覚ははっきりしていました。

授業準備についても、子どもたちは印刷や資料探しのような作業をイメージしていて、私たち教員が行う教材研究や授業設計までは考えていないようでした。子どもたちのそうした考えとてもリアルにAIの限界を捉えていると感じました。

結局、子どもたちが求めているのは「人と関わる安心感」なんだと思います。

学校の業務だが必ずしも教師が担う必要のない業務

児童生徒の休み時間対応

AIにしてほしい

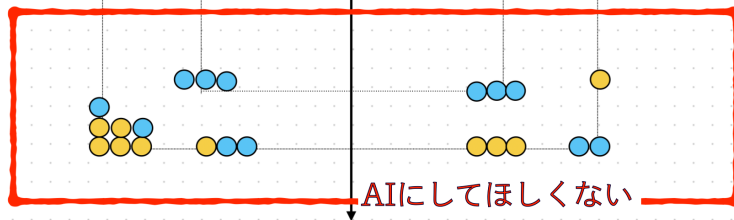
- 女
- 男
- 不明

10年以内に実現できない

10年以内に実現できる

78%

先生がいい



教師の業務だが、負担軽減が可能な業務

支援が必要な子や家庭への対応

AIにしてほしい

- 女
- 男
- 不明

10年以内に実現できない

10年以内に実現できる

89%

わからない

